

ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ④

「日刊ベリタ」で昨年の 11 月から不定期で連載している「異国に生きる ミャンマーのこどもたち」を紹介します。筆者の押手敬夫さんは、JTB の初代ヤンゴン支社長です。JTB はクーデター後の 8 月に撤退したそうですが、愛するミャンマーのためにこのような活動をつづけています。昨年、帰国後も連絡をとりあっていた運転手のミャンマー人から、「私も国軍と闘うために国民防衛隊（PDF）に参加する」とのメールがあったそうです。別れの挨拶です。幸か不幸かその後のメールで、「年齢制限で参加できなかった」とのこと。このような日本人ビジネスマンが少なからずいる一方で、自民党副総裁の麻生太郎（日本ミャンマー協会最高顧問、元首相、財務相）や渡邊秀央（同協会代表、元郵政相）のような連中がいまだに暗躍しているのは許せません。彼らはミャンマー国民の苦しみをよそに、国軍と経済的利益を分かち合い、国軍トップのミンアウンフライン総司令官から叙勲されて感謝している破廉恥な日本人です。（永井 浩）

◆2022 年 11 月 14 日 日刊ベリタ

「異国に生きる ミャンマーのこどもたち」<1>

母国語を学ぶ寺子屋教室

押手 敬夫

現在日本には 37,000 人を超えるミャンマー人がおり、その約 45%にあたる 17,000 人が首都圏に暮らしている。在留資格は技能実習が最も多く、次に特定活動や技術・人文知識・国際業務、さらに留学が続き、永住者、定住者は約 5,000 人ほどである。そのなかには多くのこどもたちも含まれ、親たちの母国の言葉や文化をよく知らない者も増えてきている。

1980 年代は留学生が中心だったが、1988 年の軍事クーデターで民主化を求める市民への弾圧や迫害から逃れるために祖国を捨てざるを得なくなった多くのミャンマー人難民が、西武新宿線の中井駅周辺にミャンマー人コミュニティを作ったのが始まりで、その後、高田馬場や大塚駅周辺に移り住み、今では「リトルヤンゴン」と呼ばれるほどに増えてきた。

2011 年以降は祖国の民主化も追い風になり、更に多くのミャンマー人が日本で暮らすようになり、ミャンマー人コミュニティの中にも世代交代が始まりだした。

高田馬場でミャンマー料理店「ルビー」を営むチョウチョウソー、ヌエヌエチヨウ夫妻も、1988 年の国軍クーデターで日本にやってきた難民のひとりである。

祖国を離れて既に 33 年が経ち、今ではミャンマーよりも日本での暮らしが長くなった。

チョウチョウソー氏は今では在日ミャンマー人のリーダーとして、多くのミャンマー人にとって精神的支柱の存在である。2011 年の東日本大震災の際には、自ら呼びかけミャンマー人の支援組織を組成して、いち早く被災地へ炊き出しにも出かけて行った。

彼はこう語っている。「軍事政権や独裁者に反対する政治活動は、個人的には全部マイナスでも何もプラスになることはありません。でも私はビルマの独裁体制を見過ごすことはできません。家族とも別れ、帰りたくても帰れない。しかし自分がビルマのためにやってきたことは自分の利益のためでなく、今ビルマに暮らしている人たちのためであり、ビルマの将来のためです。だから私個人はマイナスでも構わないのです」

2014 年にチョウチョウソー、ヌエヌエチヨウ夫妻が始めた在日ミャンマー人の子弟へのミャンマー語教育は、その後賛同者が増え 2016 年に「シュエガンゴの会」に発展する。日本で生まれ、日常生活では日本語しか話せない在日ミャンマー人子弟に、幼いうちにミャンマー語を教えておかないと、一生ミャンマー語が話せないミャンマー人になってしまう危

機感からだった。また、ミャンマー語教育を通じ次の世代がミャンマーの文化に親しみ継承するとともに、日本人との交流の場を提供し、両国民の将来の相互理解を深める架け橋となつてほしいとの願いが込められている。

シュエガンゴとはミャンマーの花ガンゴに、ミャンマー人が大好きな金（Gold）のシュエを加えた造語である。（添付写真の花弁が白い花がガンゴ。黄色の花は国花のパダウ。4月に僅か1日だけ咲く儂い花です）

現在、下は4才から上は10才まで10人のこども

たちが、毎週土曜日の午後「ルビー」に隣接する「ケヤキハウス」でミャンマー語教育を受けている。先生は奥様のヌエヌエチヨウさんを含め3名。教育担当は奥様のヌエヌエチヨウさん。ミャンマーでの高校教師の経験を生かして、異国で暮らすミャンマー人のこどもたちへ母国の言葉を忘れないよう、ながら「ミャンマーの寺小屋教育」で教えている。数か月前に会員になった私は昨日初めて「シュエガンゴの会」に参加した。

第2回では日本という異国で暮らすミャンマー人のこどもたちについて報告したい。

◆2022年11月15日 日刊ベリタ

「異国に生きる ミャンマーのこどもたち」＜2＞

タデンジュ祭を日本風たこ焼きで祝う

押手敬夫

古来より日本には春夏秋冬の四季があり、それぞれの季節に風情が感じられたが、最近では地球温暖化の影響で、春と秋が極端に短く季節感が失われつつあることを感じる。

ミャンマーでは1年の季節を四季ならず三季で呼ばれている。すなわち12月から2月の乾季、3月から5月の雨季、そして6月から11月まで半年間続く長い雨季の三季である。

中でも最も暑い雨季は文字通り日中の気温は軽く40℃を超える日も珍しくなく、外に出るとめまいを感じるほどだ。その最中の4月17日がミャンマー（旧ビルマ）暦の元日である。元日前には5日間の水かけ祭り、元日から5日間の正月休みで都合10日間の連休に入る。実はミャンマーは年間33日の祝日があり隠れた世界一の祝日大国である。7月下旬のイスラム教や11月上旬のヒンズー教の祝日は、毎年日にちが定まらず直前に決まるため更に祝日数は増えていく。

その中でも満月の日は祝日になることが多い。7月中旬の満月の日はウーゾォ祭（雨安居入り）という名の祝日で、雨季の備えとして人々は僧侶に僧衣を寄進する。雨安居（うあんご）とは雨季に僧侶たちが外に出られず、僧院でひたすら修行に明け暮れる期間のことを指しこの90日間は僧侶を思い憐れ、

結婚式を始めお目出度いイベントはもとより飲酒さえも禁止である。そして10月初めの満月の日はタデンジュ祭（雨安居明け）と呼ばれる祝日で寺院や仏塔の境内や参道には無数の口ウソクが灯される幻想的な日で、この日を境に数々の行事が解禁になり、ミャンマー人にとっては心待ちにした楽しみな日でもある。

10月8日の土曜日、高田馬場のミャンマー料理店「ルビー」には、タデンジュの祭りを楽しみに集う多くのミャンマー人家族がいた。店の玄関先を沢山の口ウソクとネオンサインで飾り、日頃着る機会の少ない民族衣装のロンジーで着飾った多くのこどもたちは、至って日本風のたこ焼きを作り日本で迎えるタデンジュ祭を祝った。

こうして日本で暮らすミャンマー人のこどもたちは、ここで祖国の祭りを知り、その多くがまだ見たことのない祖国を思い偲ぶのである。

▽「シュエガンゴの会」の授業はミャンマー語のみ

「シュエガンゴの会」で学ぶこどもたちには大きな年齢差がある。下は4才から上は10才の異なる年齢差があるこどもたちを一同に学ばせることは難しいが、見ていて感心することがあった。年長者は誰

に教えられなくても自然に幼い子の面倒を見ることだ。道を歩けば年長者は年少者の手を繋ぎ、必ず自分は車道側に身を置き幼いこどもを守ろうとする。これはほんの一例に過ぎず、どんな場面でも年少者には年上の者がつきっきりで手取り足取り物事を教えている姿は、まるで昭和の時代の日本のこどもを見ているようだ。

「シュエガンゴ」での授業は終始一貫ミャンマー語以外使わない。こどもたちは毎日学校や保育園で日本語だけの生活を過ごしており、本当は誰もが日

本語の方が楽なのだが、それでも先生は一言も日本語を使わない。すべてをミャンマー語で教え、どんな場面でも日本語は使わない。実はそれがミャンマー語を覚える近道であり、4才の幼いこどもも一切日本語を使うことなく、すべての問いに対し懸命に自ら考えミャンマー語で返答する。

こうして覚えたミャンマー語はいつしか自然に彼らの身につき、伝統文化と同様にきっといつまでも忘れないことであろう。

◆2022年11月18日 日刊ベリタ

「異国に生きる ミャンマーのこどもたち」<3>

祖国に誇りと希望を持てるように

押手敬夫

ミャンマーで毎日早朝に見られる光景は、数十人が連なって托鉢に向かう僧侶の姿である。僧侶はひたすら黙々と行進するが、目線は常に1メートル先を見て歩く。その理由は道に這い出た虫を踏まないためだと言う。

車の中に飛び込んできた蚊を、運転手は静かにキャッチし、窓を開けて空に放つ。これらの行為は、ミャンマー人の90%以上が信仰する上座部仏教の教えを忠実に守っているからこそのことである。

上座部仏教の僧侶には227の厳しい戒律があり、一般の在家信者にも五戒がある。その最初にあるのが殺生はしてはならないことであり、例えそれが虫や蚊であっても命あるものをむやみに奪うことは仏の教えで固く禁じられている。

こうした敬虔な上座部仏教徒が多いミャンマーで、昨年2月に起きた国軍クーデターにより同じ国民の命を無残に奪う残虐性は、どう考えても決して結びつくものではなく、いかなる理由も許されることはない。

高田馬場の路地裏の「ケヤキハウス」で学ぶミャンマーのこどもたちの瞳に、いま祖国の現状はいついどのように映っているのだろうか。

彼らはまだ幼く、この現実を十分理解できていないとは思えぬが、何れは必ず知ることになる。

その時、上座部仏教の教えと遠くかけ離れてしまっ

た祖国の悲しい現実を、いったいどう受け止め嘆くのだろうか。

▽「日本人は民主化の戦いに関心を」

時計の針を再び1988年に戻そう。当時、ネウインの長期軍事独裁政権に反対し、民主化を求める活動家として国軍の激しい弾圧、迫害から逃れるため、やむなく愛する祖国を捨て日本に難民としてやってきたチョウチョウソー氏夫妻。最近髪にはすっかり白いものが目立ってきたが、33年経った今でも日本で戦い続け、闘志はいささかも衰えていない。

彼は最近のミャンマー情勢についてこう語っている。「ロシアによるウクライナ侵攻が始まって以来、日本のメディアがミャンマーのニュースを取り上げる機会が少なくなり、多くの日本人はミャンマー情勢が正常に戻ったかのように考えています。しかし現実にはミャンマーでは次のような状況が続いています。1. クーデターに国民が強く反対、2. 若者の反発が意外に強い、3. PDF（国民防衛隊）と国軍とのゲリラ戦が続いている、4. 国軍はPDFを支援している人々に圧力をかけている、5. 経済危機の中、失業者が増え国民の生活は苦しくなっている、6. ヤンゴンを含め都会に犯罪が増加。ミャンマー国内で民主化のために戦っている人たちを孤立させ

ないために、これからもミャンマー情勢に多くの関心を持ち続けてください」

世界的な物価高の中、「シュエガンゴの会」の運営も、またこどもたちの親の経済状況も決して楽なものではないが、それでも強い意志を持って教える

チョウチョウソー氏夫妻の熱意と両親や人々の善意で「シュエガンゴの寺小屋教育」はこれからも続く。日本という異国で暮らすミャンマーのこどもたちが祖国に誇りと希望を持ち、彼らに明るい未来が来ることを願ってやまない。

◆2023年02月26日 日刊ベリタ

「異国に生きる ミャンマーのこどもたち」＜4＞

タマネ祭りで祖国の伝統文化に触れる

押手敬夫

インターネットで調べると、世界一祝日が多い国はカンボジアで年間28日だそうだが、実はミャンマーはカンボジアを凌ぐ世界一の祝日大国であることをあまり知られていない。

以前は28日間だった祝日が、2020年からこともあろうに日本を真似て、土日祝日が重なると振替休日制度を導入し、ただでさえ多い祝日がさらに増えた。

また7月下旬のイスラム教の祝日と、11月上旬のヒンズー教の祝日は、毎年直前に日にちが決まるため、カレンダーに記載されず祝日はさらに増える。

そんな祝日の中でも特に重要なのが満月である。3月の満月の日はタウバン祭、5月の満月はカゾン祭、7月の満月はワーゾォ祭、10月の満月はタデンジュ祭、そして11月の満月はカディン祭とそれぞれ信じている上座部仏教に因んだ祝日になっているが、旧暦にのっとっているため毎年日にちは変わる。

そして今日のテーマはタマネ祭である。250年前から毎年2月の満月の日、ミャンマーも冬にあたるこの時期、この頃に取り入れたもち米を使って作るタマネはミャンマー人にとって伝統的な祭りであり、タマネは体を温める特別なおやつである。

そもそもタマネとはタマ（米）をネ（捏ねる）という意味で、もち米、ピーナッツ、黒ゴマ、生姜にココナツを加え、それらをひたすら捏ねて作る豆餅のようなものだ。

ミャンマーではチームごとに分かれて、どこが最も美味しいか審査員を入れて競い合うそうだが、美味しくなる秘訣はいかに捏ねてネバネバになるにかかっている、それにはかなり体力が必要になる。



力を合わせて素材を捏ねる



「美味しかった！」

そうして作ったタマネを満月の日の早朝にお釈迦様に供え、近所や通りを行く人々に配ることが功德になると信じられている。

ミャンマー語を学ぶシュエガンゴのこどもたちも、今日だけは勉強ではなく祖国の伝統行事であるタマネを作ることにした。高田馬場駅近くの戸塚地域センターの調理室に集合したのは主催者のチョウチョウソー夫妻にシュエガンゴの子供たち7名とその母親5名にこどもたちのサポーターの日本人6名の合計20名。5キロのもち米を炊飯器3つも用いて炊き、みじん切りした大量の生姜とココナツ、山盛りのピーナッツを油で揚げ、それらを炊きあがったもち米に乗せて、そこに大量の黒ゴマを加えるとあとはひたすら力を込めて捏ねる。

チーフシェフのチョウチョウソーさんはもち米を研ぐところから順番にこどもたちに実際にさせる。初めて米を研ぐ経験にこどもたちは喜び嬉しそうに行う。大きなボウルに生姜やココナツ、ピーナッツに黒ゴマを加え、あとは炊きあがったもち米にひたすら力を込めて混ぜ合わせる。

こうして大人たちが苦勞して作ったタマネは、見た目が黒いため一見美味しそうには見えない。シュエガンゴの幼いこどもたちはその見た目で判断し、折角作ったタマネを「嫌だ、食べない」と最初は見向きもしない。

炊きあがったばかりのタマネはモチモチして、ほ

のかに甘みもあり美味しい。大量に混ぜられたピーナッツと柔らかなもち米が口の中でなかなか噛み切れず、ミャンマーのミルクティーを飲みながら、ひたすらタマネを咀嚼する。

その内に幼いこどもたちも少しずつタマネを口に始め、最後は7名全員が食べた。

タマネは1人では作れず家族や友人の協力が不可欠である。多くの人の手を借りて作るタマネは、共同のご馳走でもある。シュエガンゴでミャンマー語を学ぶこどもたちは、こうして祖国の伝統文化であるタマネを作り、家族や仲間の大切さを学ぶのである。

◆2023年02月15日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(13)

エスカレートする軍の残虐行為

西方 浩実

しかし翌日3月10日の夜も、再び落ち着かない夜となった。今度はサンチャウンというヤンゴン市内の地区で、日中にデモをやっていた何百人もが警察に包囲されてしまったのだ。デモ隊はかなり広い範囲に散らばっていたようだが、地区の外抜ける路地を警官隊にすべて固められ、罠にはまった状態になってしまった。

▽戒厳令を破り夜間の非暴力デモ

デモ隊たちは警官隊のトラップの中で夜8時を迎えた。戒厳令違反。デモ隊を家に招き入れ、匿ってくれる住民たちもいるが、匿った住民までもが拘束されるリスクは高い。ここ数日、警察は強盗のように家に押し入り、令状なしの逮捕を加速させているからだ。

デモ隊は警官隊と数十メートルを隔てて向かい合い、「道を開けろ!」と、声を合わせて叫ぶ。周囲の住民が、警官隊からの銃撃に備え、バリケードを積み始める。

ミャンマー中の人々が息を詰めてインターネットのライブ映像を見守る中、ついに発砲音が響く。逃げる人々。乱れる映像を配信し続ける SNS。無数の Facebook ユーザーが「キーボードファイター」とな



駅のホームで遊んでいた1歳児はゴム弾で片目を撃たれた

り、メッセージを拡散する。「サンチャウンのデモ隊を助けて!」

それに呼応するように、ヤンゴンの各地でデモが始まる。時刻は夜10時。ミャンマーでは、普段なら多くの人が布団に入っている時間だ。にもかかわらず、住民たちは戒厳令を破

り、ぞろぞろと街に出る。

私の自宅近くでも、路地に続々と人が溢れ出し、バリケードをこえて大通りに向かった。男性も女性も、中学生くらいの子どもも、パジャマにサンダル履きで、非暴力のたたかいに出る。サンチャウンの仲間を助けるんだ、という固い決意。この結束こそが、ミャンマー市民の武器なのだ。

住民たちの怒りのシュプレヒコールが、大通りから空気を震わせて響いてくる。どうか、みんな無事であるように……。身を固くして祈る私の耳に、数分後、パァン、パァンと発砲音が届く。ワァッと

いう叫び声に続き、パタパタと走る無数の足音。さつき出かけていった人々が、バリケードを超えて走り込んでくる。早く、早く。祈るような気持ちで、ベランダから見守る。

おそらく威嚇だったのだろう、銃声はすぐにおさまリ、再び静かな夜が帰ってきた。午前1時から、インターネットが遮断される。サンチャウンで何が起きて、もう誰にも届かない。(注)。

▽世界を動かせるか？反軍政の切なる願い

3月12日、軍による残虐行為は、エスカレートしている。毎日毎日、どこかで非暴力の若者が銃殺されている。実弾によって身体の一部を失った人たちの、直視できないような生々しい写真が次々にSNSにアップされる。警官に追い詰められ、助けて、と懇願する市民が、容赦なく殴られ蹴られ、護送車に叩き込まれる映像。

数日前にTwitterで見かけた、ヤンゴン在住の日本人の投稿には「自宅の近くで、暴行を受けて腕を折られた拳銃に拉致された、その仲間を返せ、と抗議に行った2人が撃たれて死亡した」などという、どうしようもなく理不尽な状況が記されていた。私も「ああ、今日はどこで何人が撃たれたんだ」と、その数字に伴うはずの感情を失い始めている。ただ毎日、虚ろな気持ちでスマホをスクロールし続ける。

一般宅への強制立ち入りや逮捕も、過激さを増している。夜間の逮捕が本格化したのは1ヶ月ほど前のことだった。警察が誰かをつかまえにくると、住民は大人数で走り出し、人の盾を作り、全員で声をあげてそれを阻止していた。でも今は、それすら「あの頃は平和だったね」と言いたくなるような状態だ。もし今そんなことをしたら、全員銃で脅され拘束されるか、数人殺されかねない。

拘束するターゲットも、もう見境なしだ。デモ参加者やCDM(市民不服従運動)に参加した公務員だけでなく、逃げてきたデモ隊を自宅に匿ってあげただけの女性や、もはや拘束される理由がわからない人まで、次々に連行されている。

連行された人々は、激しい暴力行為に遭っている。尋問から解放された男性の写真に映る、赤く腫れ上がった背中。剥けた皮膚。別の女性は、ショックが強すぎたのか薬物を打たれたのか、ぼんやりと焦点

の合わない目でブツブツと何か繰り返している。軍に逆らえばこうなるぞ、という見せしめなのだろう。次から次へと突きつけられる凄まじい不合理に、もはや怒るパワーも枯れ、ただ頭を抱えてため息をつく。

それでも、警察に強制連行されたNLD(国民民主連盟)党の議員が、拷問された拳銃に殺されて帰ってきた、その遺体の写真を見たときには、あまりの残酷さに唸り声が出た。顔は別人のように腫れ上がり、歯はすべて抜かれ、代わりに口に何か詰め込まれている。胴体には、胸から下半身へと続く切開創。縫い合わされた腹部の中にあるべき臓器は抜かれている。

武器も持たずに声をあげる人に、政治的な考えが違ふ人に、どうしてここまで残虐な真似ができるんだろう。人々を恐怖で支配する、国軍の策略。狂っている。狂っている。本当に。

今ミャンマーでは、ひとりひとりの生殺与奪の権利を、警察や軍が握っているのだ。想像できるだろうか。いつ軍や警察が家に踏み込んできて、説明もなしに連行されるかわからない生活を。そして連れていかれたら最後、無事に帰れる保証がないという恐怖を。それでも声を上げられるだろうか？

ミャンマーの人たちは「だからこそ」声を上げ続けている。もちろんデモの参加者は減っている。当たり前だ。殺されたくないなら、本当はデモなんてするべきじゃないと、誰もがわかっている。

だけど「そうしてみんなが恐れて抗議をやめたら、軍政がはじまる」と、「ここで諦めるわけにはいかない」と、市民たちは今日も声をあげている。昼間の過激なデモ弾圧を避け、夜にろうそくを片手に集まることも増えた。抗議活動で失われた命を追悼し、反軍政を誓うのだ。夜空の下、遠くから聞こえてくる叫び声や歌声を聴きながら、誰でもいいからどうか彼らを守ってください、と心の中で手を合わせ、あてもなく祈る。彼らの姿が、切なる願いが、どうやったら世界を動かせるんだろう。

注・この夜、サンチャウンで虐殺は起きなかった。デモ隊は地域住民に匿ってもらいながら朝を迎え、戒厳令が明ける頃に帰宅の途についた。

ミャンマー「夜明け」への闘い(14)

日常化する非日常

西方 浩実

3月13日、穏やかな週末の昼下がり。突き抜けるような青空。今日はデモ隊が近くにいないらしい。シュプレヒコールのかわりに、物売りの間延びした声が響いている。だが、ベランダでのんびり洗濯物を取り込んでいると、にわかにバタバタと慌ただしい足音が聞こえ、自宅横の路地に数人が走り込んできた。

▽穏やかな日常は砂上の楼閣

なんだろう、と外に目をやると、住人たちが急いでバリケード(といっても竹を編んで作った衝立(ついたて)のようなもの)を立てている。あれ?今日はデモもやってないのに、どうしたんだろう?落ち着かない気持ちで眺めていると、衝立の間隙から向こうを覗いていた住人たちは、口々に何か叫ぶやいなや、蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

30秒ほど経っただろうか。

バキッ!という豪快な音とともに竹の衝立が蹴破られ、衝立の向こう側から赤いスカーフを巻いた警官隊の姿が現れた。戦隊ヒーローの番組で、悪の集団が登場するシーン。まさにあんな感じだ。

うわ、やばい、来た。とっさにベランダの手すりの高さまでしゃがみ、目立たないようにこっそりと様子を伺う。赤スカーフたちは4~5人で、数枚の衝立を蹴飛ばしたり踏みつけて折ったりと、必要以上に暴力的に振る舞う。バキッ、バキッと、竹の骨組みが折れる音。やたらとゆっくりした動きが、妙に恐ろしい。

ふと気がつくと、路地にも、そこから枝分かれするさらに細い道にも、見渡す限り人っ子一人いなくなっている。さっきまでリヤカーを引いていた物売りも、店番をしていた露店のおばちゃんも、立ち話をしていたおじさんたちも、みんなきれいに姿を消し、息を潜めている。静まり返る街に、バキバキと衝立をへし折る音だけが響く。

執拗にバリケードを破壊した警察は、辺りをぐるりと見遣ると、ゆっくりと路地を歩き出す。後ろか



自宅横の小さな路地に、バリケードを蹴破って侵入してきた警官隊(筆者撮影)



こちらは、誰も傷つかないように、無人のデモ。エンジニアのマネキンが、市民の代わりにスピーカーを担いで抗議する(RFA Burmese)

ら警察車両が7台ほどつづく。荷台にはぎっしりと、銃を手にした警察官たち。住民の誰かを捕まえにきたのか、それともただこの道を通りたいだけなのか。このまま止まらずに通り過ぎてくれ、と念じながら、息を詰めて見守る。銃を握ったこの警官たちが、今にも引き金を弾くんじゃないかと思うと、体がこわばる。

結局、警察たちはものすごくゆっくりとしたスピードで、バリケードを2つ破壊して、通り過ぎて行った。はあ、よかった、と胸をなでおろす。

住民たちはしばらく息をひそめていたが、数分たつと、1人、2人と路上に出てきた。もう行ったよね、という感じで、軍の去った方を見やりながら言葉交わす。その話し声を聞いた住民たちが、大丈夫みたいだぞ、と家から出てくる。静止していた時

間がゆるゆると動き出す。そうして何事もなかったかのように、またいつもの生活が始まった。

私が暮らす地区は、警察のマークが厳しい場所ではなく、銃声を聞くのは数日に一度くらいのものだ。だから、そこらじゅうにバリケードは張り巡らされているものの、普段はそういう状況下なりの穏やかな暮らしが営まれている。バリケードのおかげで車が通れなくなった大通りは、デモが終わる夕方にサッカーコートに変わる。バリケードの一部である木材や机などを拝借して即席のゴールをつくり、子どもも大人も汗びっしょりになってボールを追いかけている。

そうした日々の中に、一瞬、こういう張り詰めた瞬間がある。穏やかな日常が、砂上の楼閣であったことを思い出す。

今、外では地域住民たちが、破壊された竹の衝立にかわり、土^{#22218}袋を積みあげてバリケードを強化している。聞こえてくるのは、住民たちののんびりした話し声や笑い声。軍の凄まじい暴力と、穏やかな日常のギャップに、戸惑うような、救われるような、複雑な気持ちになる。

▽ブラックアウトするミャンマー

3月15日、ヤンゴンの情勢はさらに悪化した。日本の新聞では、ミャンマー全土で「38人が死亡」と報じられていたが、実際にはニュース源である地元メディアも、死傷者のカウントが追いついていないという。軍のターゲットにされているのは、ヤンゴン北部から東部の工業地帯。ヤンゴン中心部に比べると、貧困者層の住宅が多いエリアだ。おそらく、各国大使館や軍関係者の居住地域などがある中心エリアは避けているのだろう。

中国系の工場には昨日、次々と「何者か」によって火が放たれた。中国が裏で軍を支援していると思える市民が暴徒化したのか、と思ったのだが、市民らは「軍の自作自演だ」とSNSで猛反発。どちらが真実か断定はできないが、軍にはこうした卑劣な工作についての前科がありすぎるほどある。（もちろん軍はこれを、暴徒化した市民によるものと断定し、非難している）

TwitterやFacebookには、雨のような銃声の中、走って逃げるデモ隊の姿。中には、後ろから銃撃さ

れて崩れ落ちた仲間をどうしても捨て行くことができず、足を止めてしまう人もいる。盾を背中に背負い、仲間の上に覆いかぶさって、もうこれ以上仲間の身体が傷つかないようにと、必死で守る。追いついた警官や兵士は、その身体を忌々しげに蹴り出し、仲間から引き離して引きずっていく。

拡散された動画や画像の中には、軍や警察側から流出したと思われるものもあった。「これから〇〇地区で撃ちまくるよ。この瞬間を待っていたんだ」と楽しげに話す兵士。市民が必死で逃げる様子を、のんびりと橋の上から眺める警官隊。夜空の下、パーティ会場でカラオケやダンスを楽しむ警官と兵士たち。内部告発にしては、撮影者が特定されるリスクが高すぎる。なぜ、こんなものが流出してくるのか。あるいは国軍側が市民を挑発しているのか。わからない。

さらに悪いことには、ついにモバイルインターネットが完全に遮断された。これまでインターネットの遮断は、深夜1時から朝9時までの8時間だった。しかし今日から、スマホからのインターネットは24時間つながらなくなる。私の場合、自宅にWifiがあるので、朝9時以降はインターネットを使える。しかしミャンマーの一般家庭で、自宅にWifiがある家は相当少ないだろう。

問題は大きく2つある。1つ目は、スマホでの情報共有ができなくなること。今までミャンマーの人たちは「どこで警官がデモ隊を弾圧している」「〇〇地区に軍のトラックが集まっている」などという情報を、SNSやチャットを使い、リアルタイムで共有していた。そうしてデモ隊たちは、できるだけ危険を回避しながら守備に徹してきたのだ。しかしモバイルインターネットが切られると、こうした情報共有の手段が失われてしまう。

2つ目は、今日の前で起きていることを発信できなくなることだ。路上でデモ隊が武力弾圧されても、現場の映像は今までのようには上がってこなくなってしまう。実際、3月14日まではFacebookをひらけばいつも、どこかの誰かがデモの様子をライブ配信していたのだが、15日以降はほぼ上がってこない。友人によると、ミャンマーでは保存容量の大きい高価なスマホを持っている人がまだ少ないので、録画を撮りためておくことができず「録画しておいてあ

とで投稿」ということが難しいのだという。

これまで国際ニュースになってきた画像や映像などの中には、一般市民のスマホからの投稿が相当数含まれていた。まず誰かが SNS に投稿したものが、ユーザーたちによって瞬く間にシェアされ、拡散されていく。ローカルニュースがその真偽を確認し、記事や映像として編集、配信する。最後に、外国メディアがそうしたローカルニュースの情報を引用し、報道する。つまりリアルな一次情報は、市民が路上から、モバイルインターネットを使って発信してきたのだ。

そうした映像は国際社会に発信されることで、ミャンマー市民を守る盾にもなっていた。軍が市民に対してどれほどの弾圧をしているのか、記録し告発する監視カメラの役割を担っていたからだ。

だが、モバイルインターネットの遮断によって、

ミャンマー関連のニュースはガクッと減るだろう。デモ隊が銃声の中、逃げながら撮った臨場感のある映像。警官隊と対峙する若者の、張り詰めた表情。そうした「絵になる」情報は、もう消えかけている。

だけど、忘れないでほしい。映像が届かなくなっても、覚えていてほしい。市民たちは自由をあきらめずに、闘い続けている。あまりに理不尽で残虐な暴力に対し、必死で抵抗を続けている。もはや警官だけでなく、迷彩服の兵士が直接制圧し始めたヤンゴンで、今日も自宅の窓には、風に乗ってシュプレヒコールが届いている。

最後にダメ押しで、信じられないニュースをひとつ。3月19日、ロシアから軍に、兵器が送られてくるらしい。ミャンマーの市民を殺すための兵器だ。やりきれない。どうして世界は、こんなことがまかり通る仕組みになっているんだろう。

◆2023年02月21日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(15)

人間としての自由だけは奪えない

西方 浩実

3月20日。先日、CDM(市民不服従運動)に参加した公務員たちを支援している大学生と話す機会があった。線の細い、優しそうな青年で、柔らかな口調で英語を話す。彼はデモに参加するかたわら、公務員宿舎から追い出されてしまった公務員を、仲間と一緒に何十世帯もサポートしているのだという。安い部屋を探して大家さんと交渉したり、食料を届けたり、わずかながら金銭的なサポートもしているそうだ。

▽無数の市民がCDMを支え合う

「軍に見つかると危ないから、自宅には帰っていない」と、彼はカラツとした表情で話した。悲壮感もなければ、怒りに燃えている風でもない。仲間と一緒に知人のアパートに身を寄せているんです、と何でもないことのように言う。

彼への寄付を申し出ると、彼は申し訳なさそうに、こう言って断った。「アパートの家賃はタダなんです。ご飯も3食、近所の人に食べさせてもらっています。交通手段は、友達のご両親が『この車を使っていい

よ』と僕たちに貸してくれました。デモのプラカードも誰かが印刷して僕らにくれるし、みんなチャリティで応援してくれている。だから今は、お金は必要ないんです」

ああ、ミャンマー人だなあ、と思う。私の同僚のミャンマー人たちは、飲みに行くと、必ずおごってくれる。明らかに彼らよりお金をもっている私に「次は払ってもらうから」などと言いながら。(もちろん「次」はなかなかこない。)そして、前もって「私が奢るから飲みに行こう」と誘うと「予算はいくら?」と、どストレートな質問をし、私のお財布事情に合わせて店を選んでくれる。「もらえるものはもらっとこう」的な卑しさが本当にないのだ。

CDM のサポートをする彼はもちろんだが、彼をかくまっている大家さんや、車を貸してくれる大人たち、ご飯を配る人や、プラカードを印刷する人……無数の市民が、決して小さくないリスクを背負いながら、自分にできることをやっている。その姿を見た人が、また列に加わる。

久しぶりに会った近所のおじさんは「民主主義は勝つよ。100%の気持ちでそう信じている」と胸を張った。実はクーデター直後、彼に「民主主義は勝つと思う？」と聞いた時、彼はたった一言「軍は強い」と、悲しそうに答えたのだった。どうしてそんな風に考えが変わったの？と聞くと、彼はこう言った。「勝つかな？負けるかな？じゃなくて、勝たなきゃいけない。そう思うようになったんだ」。

いつからそんな風に気持ちが変わったの？「軍が市民を殺しただろう？あまりにもたくさんの人が殺されてしまった。子どもでさえ…。軍政は絶対ダメだ。軍に支配されたミャンマーは今、毎日、未来を失い続けているんだ」。こうなる前は、そう思っていなかったということ？「兵士だって、同じ人間だと思ったんだ。仏教徒なら、ダルマ(仏法)を知っているはずだと思った。だけど、そうじゃなかった。あれはもう人間のすることじゃないよ」

クーデター後、軍からは残虐行為に加え、信じられないような通達が出続けている。「軍政への不信感をあおったら(最高刑で)死刑」「バリケードを見つけたら、その周辺住民を撃つ」など。市民は表面上、大人しくバリケードを撤去したりして、何となく軍に従っているように見せている。プライドは脇に置いて、命令に従うふりをして、命を守っているのだ。しかし、終わらない軍の非道なふるまいは、静かに市民の心を結束させている。

正直、これまで私は何度か「もうダメなんじゃないか」と思うことがあった。抗議活動への弾圧を軍が宣言したとき。大勢の若者が傷つき、殺されていったとき。インターネットが遮断されたとき。

だけど、ミャンマーの人たちはいつも、あっと驚く方法で、「その手があったか！」と思うような創意工夫で、対抗し続けてきたのだ。故障車(のように見せかけた車)を街中に放置して交通を止め、兵士が近寄れないように、道にロンジーを吊るした。夜間の銃声には、打ち上げ花火で応えた。先の総選挙で選ばれた議員たちは、オンライン上に臨時政府 CRPH(注1)をつくった。軍からすかさず反逆罪を宣告された CRPH のリーダーたちは「軍から反逆罪を課されたということは、正義のために闘っていると認められたということだ」と誇らしげに胸を張った。国連総会では、ミャンマーの国連大使がまさかの3本指で反軍政を示し(注

2)、今も国際社会に軍政を訴え続けている。

明日は、サイレントデモをやるそうだ。だれも外に出ない。反軍政の声も上げない。そうしてあたかも従順にひきこもり、国全体が沈黙することで、軍に反対する人がどれだけいるのかを示す。命を大事にした、ナイスアイデアだと思う。

以前読んだ本にあった、こんな言葉を思い出す。

「すべてを奪われても、たったひとつ、与えられた環境でいかにふるまうかという、人間としての最後の自由だけは奪えない」

▽屈辱の国軍記念日

3月27日、国軍記念日。年に1度、ミャンマー国軍の華々しい威光を世に知らしめる日だそうだ。毎年この日は、各国の要人や軍人を招いて記念式典をすることになっている。市民の間では、軍が27日までに民主化運動を完全に封じ、クーデター後の混乱にカタをつけたがっている、という説が広がっていた。つまり軍が27日に向けて弾圧を強めるだろうと、警戒感を高めていたのだ。

先週、ヤンゴンから離れることを決心した友人はこう話した。「うちの夫は公務員で、CDMに参加しているの。今までヤンゴンで息を潜めてきたけど、いよいよ何が起こるかわからない。安全な場所はどこにもないけど、田舎ならヤンゴンよりも生き延びられる可能性が高いから」。ミャンマーの国民が、ミャンマーの国軍や警察から、命を守るために逃げているのだ。この異常さがわかるだろうか。

国軍記念日の前の日、国営放送では「国家を破壊する者は、後頭部や背中を撃たれる危険がある」という、耳を疑う通告が放送された。そもそも一体どちらが国家を破壊しているという認識なのだろうか。

それでも、実は私は「27日は大丈夫なんじゃないか」と楽観視していた。市民たちが、以前よりずっとおとなしくなっていたからだ。2月にヤンゴンの大地を揺るがした大群衆のデモは、あまりに凄惨な弾圧をうけ、小規模で散発的になっていたし、軍への憎悪をあおるようなポスターも、街ではほとんど見かけなくなった。バリケードをみつけたら所構わず銃撃する、という狂った通告の翌日には、地域住民たちが粛々と、路地に積み上げた土囊袋を片付けていた。

毎日、どこかで誰かが襲撃され、殴打され、殺されて、あろうことか父親に抱かれた7歳の少女まで銃殺されて・・・それでもヤンゴンの人々が、怒り狂って暴力的に立ち向かう、なんてことにはならなかった。あからさまに軍に逆らえば、犠牲が増える。これ以上、命を失うわけにはいかないのだ。そんなミャンマー市民の我慢強さを横目で見ながら、私は「このまま何事もなく過ぎますように」と、希望的観測にすがっていたのだった。

しかし現実とは、まったくそうはならなかった。その朝、目を覚ますと既に、郊外に住む日本人の友人から「どうしよう、めちゃくちゃ銃声が聞こえる」とメッセージが届いていた。ああ、軍はやる気なんだ・・・。愕然とする。

ミャンマー人の友人に連絡してみると、彼は取り乱していた。その日の早朝、デモの準備中に突然軍に襲撃され、仲間をひとり失ったのだという。「僕らは集まっていただけだったんだ！まだ一言も抗議してなかったのに！」と繰り返す。そうなんだ、ひどい、信じられない、と相槌を打つことしかできない。無力。

モバイルインターネットが遮断される中、市民が命がけで撮影した映像や画像が SNS に届く。銃声とともに、動きが止まりパタッと倒れる少年。助けに行こうとする仲間たちは、鳴り止まない銃声の中、地団駄を踏み、絶叫する。すぐそこに倒れているのに、今なら助かるかもしれないのに、銃撃があまりに激しくて近づけない。

銃声。流血。叫び声。頭部を吹き飛ばされた、むごい写真。おかしい方向に曲がった腕。側溝に投げ込まれた女性の遺体。道路に転がる脳。これが全部、今、この穏やかなミャンマーで起きているなんて。心が苦しくて、吐きそうになる。

弾圧が本格化してから 1 ヶ月。私たちは毎日、どれほど凄惨な光景を目にしてきただろう。虐殺している軍には一分の正当性もなく、虐殺される市民には一分の罪もない。どうしてこんな狂ったことが、誰にも止められないんだろう。

ミャンマー北部の街では、夕方 1000 人を超える人々が軍病院に集結した。要求は「今朝撃たれた仲間の遺体を返せ」。もはや、民主主義のためでも自由のためでもない。死傷者の数は積み上がり続け、夜 9 時

半までに 114 人が殺されたと報道された。

夜、ミャンマー人の友人と電話で話をした。どこで何人が殺されたらいい、ミャンマーは世界最悪の国になった、という何の希望もない会話をしたあと、何か明るい話はないものかと思い「そういえば、CDM がノーベル平和賞にノミネートされたね」と言うと、彼はハハッと自嘲的に笑い、こう言った。

「ああ、あれはいいニュースだったね。でも、その非暴力・不服従で何百人もの命が失われたんだ。ノーベル賞をもらったって、ぜんぜん釣り合わないよ」

<注>

1・連 邦 議 会 代 表 委 員 会 (Committee Representing Pyidaungsu Hluttaw)。クーデター直後の 2021 年 2 月 5 日、クーデター政権に対抗して組織された民主派の政治組織。先の総選挙で当選した与党 NLD の議員など 17 人によって構成された。2021 年 4 月 16 日に国民統一政府(NUG、註 26 参照)を発足させた。

2・チョーモートウン国連大使は 2 月 26 日の国連総会で、軍事クーデターを批判。民主主義を取り戻すために国際社会に協力を求め、3 本指を立てた。国連大使が軍に脅されて軍を擁護するのでは、と懐疑的だったミャンマー市民たちは、この演説に感激。翌日のデモには早速、国連大使の写真を掲げる人々の姿があった。なお軍はすぐに国連大使の解任を発表し、大逆罪で逮捕状も出したが、氏は従わず、2022 年 8 月現在も国連大使として活動を続けている。

